

別記様式第6

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	松本 舞
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
論文題目 ヘンリー・ヴォーンと17世紀神秘主義思想			
論文審査担当者 主 査 教授 吉 中 孝 志 審査委員 教授 今 林 修 審査委員 教授 井 内 太 郎 審査委員 同志社大学 教授 圓 月 勝 博			
〔論文審査の要旨〕 <p>本論文は、17世紀英国の神秘主義、特にヘルメス主義思想が、詩人ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-1695) に与えた影響を、語彙、イメージ、思想における観点から分析し、錬金術、万物照応の理論、物質に内在する生命等の理論が、キリスト教的神秘主義と相俟って如何に詩人の心と言葉を錬成したかを考察している。ヴォーンテキストをヘルメス思想と関連付けて解釈する批評は20世紀前半に行われていたが、それを詩人の生きた17世紀中葉の歴史的、政治・宗教的文脈の中に置いて、清教徒批判の言説として読み直す試みは、新歴史主義的批評理論を援用した新たな知見を与えている。</p> <p>序章では、ヴォーン『火花散る火打石』(Silex Scintillans, 1650) の冒頭のエンブレムに錬金術的な意味が見出されていることを提示しながら、ヴォーン詩群を神秘主義思想から論じた先行研究を整理し考察を加えている。</p> <p>第一章は、チョーサー『カンタベリー物語』の中で描かれた、錬金術と賢者の石の描写を起点にして、17世紀中葉に至るまでに出版された錬金術のマニュアルを手掛かりに、錬金術の定義や工程を概観している。また、政治的利用の観点から、清教徒革命の時代の錬金術用語や概念の流動性が極めて高いと主張するアンドリュー・メンデルソーンの指摘を出発点にして、錬金術と政治との関係について論じている。</p> <p>第二章では、16、17世紀の詩人たちの錬金術の描写を検証し、二つの現れ方があることを指摘している。黄金時代を招来する錬金術師としての統治者を描くような肯定的用法とエリクシルを追い求める錬金術師たちの愚かさや、彼らの詐欺師的側面を浮き彫りにするような否定的用法である。後者に関しては、その代表例としてベン・ジョンソンの『錬金術師』が再検証されており、清教徒批判の言説となっていることが指摘されている。</p> <p>第三章では、キリスト教神学と錬金術との関連性が検証され、人類の墮落と救済が、罪によって生じた毒とその浄化という霊的錬金術の文脈で説明されている。ヴォーン詩行の中に見いだされる、墮落に伴う音と罪との関係、騒音と調和のとれた音との対比、感覚器官と幼年時代との関係が、清教徒批判を内包していることが論じられている。特に、急進派清教徒たちの「新たな光」(New Light) や宗教的熱狂主義 (enthusiasm) を錬金術工程でしばしば言及される過度な、誤った熱と重ねて読む解釈、さらに、終末論的描写と錬金術工程におけるガラス化とが二重写しになっているという指摘は卓見である。</p> <p>第四章では、ヴォーン表現がヘルメス医学の理論を利用したものであることを明らかにしている。マグダラのマリヤを描いた詩の中で、彼女が悔い改めの涙という真の錬金術による秘薬を得る一方で、パリサイ人に暗示された清教徒の偽りの聖人性への批判が、「らい病」という疾患の描写を伴って試みられていることを指摘している。</p>			

第五章は、ヴォーンが神秘主義思想に準じた自然観を持ち、その生きた自然の概念を利用することによって、自然を物理的に破壊し、霊的に汚染する清教徒の罪を暴き、批判していることを明らかにしている。

終章では、ヴォーンが自身の心を「火打石」に喩え、神の力によって火花を散らせようと試みるのは（換言すれば、彼が詩を書くのは）、比喩的に「固く頑ななこの世の火打石」である人間が、他の被造物たちとともに、真の錬金術師である神の錬金術を受けることによって変容を受け、墮落前の黄金状態へと帰ってゆくためのエリクシルを取り出す試みであったことを示し、本論の結論としている。

序章での自説の明確化、及び歴史学用語の使い方に関して若干の修正が望まれる箇所もあるが、総じて、第一次資料に基づきつつ、これまでのヘンリー・ヴォーン研究に対して新機軸を打ち立てた、秀逸な研究論文と言える。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。